



### 金ヶ崎、遠野

#### 会誌委員会

平成7年9月28日正午、私は東北新幹線の水沢江刺駅にいた。近くの金ヶ崎で予定されている日本知的財産協会の月刊会誌「知財管理」を編集する会誌委員会の月例会議に出席するためである。私は勤め先の会社からこの委員会に派遣されて三年目になる。

駅前のロータリーにはそれに参加する他の委員十数人がホテルから迎えに来るマイクロバスを待っている。ほとんどはラフな服装で、背広を着ている者は四五人、ネクタイをしている者はさらに少ない。会議に出席するための団体というよりはこれから女性のグループと合流して合同ハイキングに行くのだが肝心の女性グループを乗せたマイクロバスがなかなかやってくないので待ちわびている、といった風だ。私自身は夏背広に細ネクタイといった恰好だが、烏打ち帽をかぶり靴はハイキング用のもの、それに革製のバックパックを背負っている。

風が強く、外に長くいるとつらくなるので私は駅の待合室に入って椅子にすわっている。ポケットワープロを取り出しこれに最近起きたこと、現況、そしてこれからの予定をタイプしている。そしてこれから書くこの紀行文はおおかたこのポケットワープロに打ち込んだ内容を起こして記録し直したものだ。ようやくマイクロバスが到着したのでここを出よう。

### 金ヶ崎

さて、この会誌委員会の集いは毎月東京にある日本知的財産協会で行われたが、年に三度は地方で開かれ、今回は水沢江刺駅から車で20分くらいの金ヶ崎にある公営ホテルで開かれることとなった。参加者は関東のみならず大阪や名古屋からも来る。地方で会議をする場合には決まって木曜日から金曜日にかけて行われるので、それが終わると委員たちは朝からゴルフや観光等に乗り出す。ラフな格好で参加する者が多いのはこのせいで、服装から判断する限りは会議よりもその後の観光のほうが主目的の出張であろうか。

大阪・名古屋から参加するグループはあらかじめ綿密なスケジュールのツアーを組んでおり大型レンタカーを借りて遠くへまで足を伸ばす。その他は、このレンタカーツアーに便乗する者、二三人で近くを回遊して帰るグループ、あるいはひとりでのんびりした旅を楽しむ者、さらには家族を呼んで合流し家族旅行を楽しむマイホーム主義者、と色々である。たいていはどこかであと一泊して土曜日に帰るのだが、都合悪く金曜日には帰る者、あるいはひどい場合には仕事の都合で木曜日の会議が終わると日帰りしてしまう不運な者もある。

さてこの月例会議はホテルの会議室を借りて行われ、これが5時頃に終わると皆割り当てられた部屋に行って寛ぐ。ここでは荷物を整理しながら同室の者同士でお互いの会社での苦労話をしたり、翌日の観光の予定を説明し、名所等の情報交換をしたり、旅に誘い合ったりもする。三年目になる私はここでひとしきりリコーダーの演奏をして部屋の気分を和ませる。やがて一段落すると連れ立って大浴場に行き、裸の付き合いということになる。ここでおおかたは浴衣と丹前に着替えて戻ってくる。

温泉で汗を流しビールが恋しくなるころ委員は三々五々宴会場にやって来る。女性メンバーがいれば彼女らがどこにすわるかが争われる。委員長の挨拶と乾杯の音頭で宴は開始され2時間くらいの懇親がおこなわれる。たくさんの人が酒を注いで回るが、これが苦手の私は終始同じ場所に座っている。それに古式に則り浴衣と丹前を着ているときは肌着は一切着用しないことにしているので、ここでの私の行儀や身ごなしはいい。終盤にはカラオケで自慢の声を披露する者も続出し、その他の余興も披露される。私の記憶に鮮やかなのは加沼氏のガマの油売りの口上だ。そして私自身も最後にはここでリコーダーを演奏することになる。

さて、この席が開けても引き続き幹事部屋にて二次会が催される。ここでは人数が減るが、入れ替わり立ち変わりいろんな仲間が出入りする。人数に反比例して本音が吐露されることが多くなるので、この場での歓談は面白い。だから宴会ですでに飲み過ぎて酒はもう飲めなくなった私も努めて二次会にも参加し11時頃まではここで雄弁家諸氏の話の堪能する。あとで聞くと深夜の饗宴は12時をずっと過ぎて終わったということが多い。

翌朝私は早く起きて朝風呂にゆく。たいてい他に二三人の委員が湯につかっている。しかし皆眼鏡を掛けていないのでこちらもよく見ることができないし、近くで見えても眼鏡無しで人相が変じて定かでない。「いやあ、〇〇さんでしたか」と湯舟の中で隣り合わせになって朝の挨拶となる。7時半よりビール付きの朝食会が食堂でなされ、これで解散となる。

さて金ヶ崎のホテルでの朝食会の後、マイクロバスの出る時間までしばらく余裕があったので、同室の加沼氏と私とは散策に出かける。バードウォッチングを趣味とする加沼氏は外出時にはたいてい双眼鏡を持っている。首にかけた双眼鏡を時折のぞいては私に説明してくれるが、私は鳥に興味ほとんどない。

ホテルのまわりの緑地を歩くと、ホテル付属のテニスコートで地元女性のテニス大会が開かれるらしく多くの女性プレーヤーが準備をしていた。早朝の太陽に照らされた彼女らの健康的な姿はすがすがしい。建物を一周して帰って来るとすでにマイクロバスが玄関に待機していた。私らは急いで部屋に戻り身支度を整える。

## 因縁

さて、私は今回の観光は加沼氏に同行することとし、予め彼に旅の計画をすべて任せておいた。彼と二人三脚の旅をするのは二回目で、前は新潟で会議があったときで、台風到来のために佐渡行きを一日遅らせることとなった私は彼に誘われ霊峰弥彦山と一緒に登った。また後には、熊本の出水に白鳥飛来地と一緒に訪れることとなる。

集団行動をあまり好まない私は以前の地方開催会議の折には、たいてい一人旅を、それも折り畳み式軽自転車を持参してサイクリングツアーを楽しんだ。しかし委員会歴三年目に入ってから心臓をもっといたわるべきとの医師の進言と、他の人との交流をもっと経験すべきとも思い、他の計画に加わるようになった。そして今回は遠野を訪ねるという加沼氏に再び同行することとした。しかし私と加沼氏の組合せは面白い。加沼氏は家族を呼び寄せ家族旅行を楽しむマイホームタイプ、一方私は一人旅愁を楽しむタイプ、この正反対のタイプの人間の組合せは他の連中から見れば不可解であったろう。しかし私と加沼氏には因縁がある。

私はずっと以前に日本知的財産協会の主催する研修で英文特許明細書作成のためのコースを受講したことがある。講師はきびしい弁理士で毎回宿題がたくさん出され、休憩時間用の課題まで出すほどの徹底さだった。そして二人ずつの組が作られ、当番の組が共同で宿題の英文明細書を作成し発表し、添削を受けるのであった。私はX氏とペアを組んだ。超一流企業であったX氏の会社の名は覚えたが彼自身の名はすぐ忘れてしまうくらいの付き合いだった。そして半年くらいして私らの番が巡ってきた。しかし、そのころ私は会社での仕事が多忙を極めるようになり、この宿題をこなす余裕がなくなり、ついに我々の当番の日にはクラスをすっぽかし、それ以後もずっと姿をくらませた。相棒のX氏には申し訳ないことをしたという罪意識が残ったが、もう一生巡り合うこともない人だ、と忘れるように心掛けた。そしてそれから数年後、私はこの会誌委員会に入って活動するようになる。やがて与えられた業務にも慣れてきてまわりの様子もうかがう余裕ができてきたころ、同時期に委員会活動に参加した加沼氏の会社がX氏の会社と同じであること、それに待てよ加沼氏をよくよく見るにX氏を彷彿とさせる面影をたたえているぞ、と思うようになった。そしてあるとき思い切って尋ねてみると、X = 加沼であることが判明した。彼は私を会誌委員会に来て初めて見たときから、「あっ、あいつだ」と思ったが、自分の方からは言わないでおこう、と心に決めたそう。これを聞いたときは私は全く面目なかった。

## 葉袋

さて、私らは多くの仲間と朝9時に出たホテルのマイクロバスでJR水沢駅まで行き、そこで私と加沼氏以外の同僚はじきに入ってきた電車に飛び乗った。

残された二人はあらかじめ予定していたとおり、まず近くの高野長英記念館に徒歩で赴いた。大

宮に住んでいた加沼氏の祖先がこの超人が逃避行してきたのをしばらく匿ったことがあり、このとき長英が謝礼に愛用の巾着を残していったという。これは虎の皮製で薬を入れるためのものであった。そして時は過ぎ長英記念館ができたことを知った加沼氏の父はこれを記念館に寄進したという。したがって加沼氏は先祖から伝え来る家宝ともいべきこの代物を一見せばやとこの館を訪ねたのであった。

長英記念館は比較的小さなものだった。受付には気品ある初老の婦人がおり、私らはわずかの入館料を払って中に入った。私は30分くらい中を見学し、意気揚々として外に出た。高野長英、このような偉大な先達が日本にいたことが頼もしい。加沼氏はここに虎皮製らしい巾着が陳列されているのを見つけ、さては我が家伝来の長英の形見かと思い、受付の女性にその由来をたずねた。私は前庭で落葉を受けながらソプラニーノ リコーダーを奏で始める。すると鳥々は囀りをやめ、代わってよく通る女性の声が笛の調べにのって聞こえてくる。

「私どももここに長らくは勤めておりますが、その巾着のことは詳しくは存じておりませぬ、さりながらおよそ聞き及んでいることとお話しいたしましょう。昔逃亡の身であった高野長英、川越に身を隠していたとき八千代と申す女性と親しくなりその庵に逗留することひと月、しかれど近隣に密告の者あってここも去る。この女長英と別れがたく同行す。歳暮れ冬深まり、風冷たき晦日の夜、長英密かに大宮の地に入りしが・・・」

話が終わり加沼氏が神妙な顔をして館から出てくる。私は笛をしまい、ふたりは無言のまま落葉を踏みながら公園を通過して栗駒神社に赴いた。加沼氏は鳥が鳴くたびに立ち止まり、双眼鏡をその声のほうに向けてのぞいた。

## 遠野物語

水沢駅に戻ると私らは遠野までの切符を買って東北線下り盛岡行き電車に乗った。そして花巻で釜石線に乗り換える。しかし私が柳田国雄の「遠野物語」で有名な遠野に到着したころ、加沼氏は東北線を北上し盛岡駅に向かっていった。彼は不幸なことに自分のバックパックを花巻駅で列車を乗り換える際に盛岡駅行きの列車に残したままだったのだ。それに気づいてバックパックを求めて盛岡までかの列車を追いかける羽目になってしまったわけだ。

こうして花巻からしばらくの一人旅となった私は缶入りのオレンジ・リキュールをちびちび飲みながら窓の外の移りゆく景色を楽しんだ。遠野に行くのは初めてだ。今回の旅の前に「遠野物語」を読もうと思い、本屋に行って少し立ち読みした。結局購入するのはよしたが、そのときわずかに読んだ中で印象に残ったのは、ある小さな説話のおしまいに「遠野ではこういった不可思議なことが他所に比べてよく起こるようだ」という文章だった。これが私の今回の旅への期待をみるみる高めていった。

さて加沼氏は今は五十を越えるサラリーマンだが、若いころからの文学青年で大学ではドイツ文学を専攻し、グリム童話などの怪奇文学にはかなりの憧憬があり、日本の代表的怪奇文学「遠野物語」は少なくとも二度は読んでいた。しかし怪奇文学者の常で、この類にのめり込むといろんな怪しいキャラクターの悪戯に悩まされることとなる。聊斎志異の作者蒲松齡が科挙の試験に行く途中に狐や狸の類にばかされて遠道をし試験に間に合わなくなり落第したことはよく知られていることだ。そして加沼氏もこの宿命を免れることはできず盛岡まで行くこととなった。さて彼氏の遠野遠道訪問の次第はこうだ。

上述したように、私らは、JR水沢駅でくだんの盛岡行きの列車に乗った。次の駅で乗ってきた老婆がそれほど重そうとも思えない荷物を棚に上げようと持ち上げたがうまくゆかず、列車が動き始め、彼女はよろめいた。加沼氏はすぐに立ち上がってその荷をとって彼女のために棚の上の彼のバックパックの横に載せた。そしてその老婆は彼に感謝し彼の隣に座った。しかしじっと下を向いたまま彼に話しかけるふうでもなかった。一方加沼氏は今度は彼女が降りるときにその荷を棚から下ろしてあげなくてはならないという気配りをせねばならず、列車が駅に近づくたびに彼女が降りるか否かの様子をうかがった。そしてこの老婆は駅が近づくたびに上の自分の荷物を見上げて、加沼氏に気をもませた。しかしこの自らの親切心が彼の自分の荷物への配慮を完全に麻痺させた。

彼女は結局私らが花巻で降りたときにも加沼氏の棚上のバックパックとともに列車に残った。さてこの婆さんは終点の盛岡に着くと加沼氏のバックパックを駅員に預け、この忘れ物の持ち主は縁付きの帽子をかぶり角張った顔をしているので一見小型の寅さんといった風の男性だ、と言って去っていったそう。

## 昔話村

遠野駅に着くと私は、そこに旅行者のために置いてあった幾種類もの遠野の地図をかき集め、パンを買って昼食をとり、駅前でレンタル自転車を借り、まず近くの博物館に走った。受付嬢が、しばらくしたら近くのおの昔話村で「おばあちゃん」の昔話が始まりますよ、と言うので私は館内を足早に一巡りするとまた戻ってくると言ってひとまずは博物館を出て、その昔話村に行ってみた。以前から私は昔話をする語りべという人たちに興味を抱き続けていた。

行ってみると昔話のライブがされるのはおみやげ屋の二階のホールで、ここは観光バスのコースに入っているらしく、二十人くらいの団体客が幾重にもなって並べられたベンチにすわっている。その奥に、民家のいろり端を模して造った低いステージがあり、その上でおばあちゃんというにはまだ若いもんぺ姿の婦人が座布団の上に正座して東北の言葉で民話を語っている。私は後ろの方にすわり、話に耳を傾けた。東北弁は私には難しいが、観光客用にわかりやすくした版を話

すらしくストーリーは理解できた。

この婦人がちょうど二つ目の話を終えたとき、急ぎ足で階段を上がりこのホールに入って来る人がいた。ステージ上の婦人はその人を見るなり、ぱっと顔が明るくなり、「やあ、さむとん婆さま、おそおにけらちまって、どげんさらはらっぱ」と言った。私は記憶力が弱いうえに、東北弁には通じておらず、これを正しく記録することは不可能なので、婦人がこう言ったというよりは、婦人が言ったのがこのように私には聞こえたと言ったほうが正しい。振り向いてその新来者を見ると、それはなんとあの東北線の電車の中で加沼氏の横にすわった老婆ではないか。

「やびょうあっち盛岡に、ものあじけにうただべな」そう言うと、このばばはするするとステージにはい上がり、婦人はおののいて一礼をしてステージを退いた。おそらくこの婦人はばばが遅れていたのでピンチヒッターとして語りべをつとめたのであろう。さてこの寒戸（さむと）のばばがなぜ加沼氏にあのようないたずらをしたかはわからないが、彼が遠野を永年訪れなかったことが遠野のキャラクターたちを不機嫌にさせていたのかもしれない。そんなわけで寒戸のばばのもくろみは永年遠野を訪れなかった怪奇文学者加沼氏に幾ばくかその疎遠に協力してあげましようというものであったろう。

「むがす、あったずもな」寒戸のばばは先の語りべ婦人が残していった湯飲みから茶を飲み干すと話を始めた。「松崎のさむとつえだつが、むかす、そこのえのべっこなおなごわらすこ、遊びさ出はったったずが、いっこ家さ来ねがったずもな。さあ暗くなつたす、家の人たづあんつことすて、そごらたねであるったども、どっこにも・・・」

この寒戸のばばが自らの悲話を語るのを聞きながら、私は自分が遠野に足を踏み入れてしまっていることを初めて実感した。彼女の話し方の中には催眠術師のけだるさを誘うような抑揚に似たもの、さらには呪文のような怪しい抑揚が感じられ、私はすぐに唇を噛み彼女を上目遣いににらみつけて、かかり始めていた金縛りを自らの力で解いた。しかしすぐに立ち上がることはできず、この寒戸のばばの悲話をしまいまで聞くほかすべはなかった。話が終わると急に体が軽くなり、私は立ち上がりあとずさりしながらそこを去った。

曲屋（まがりや）

その夜、私は、加沼氏が予約しておいた民宿「曲屋（まがりや）」に逗留した。曲屋というのは棟がL字状に折れているからこのように呼ばれ、冬木枯らしの厳しい北国では古くから伝わる合理的な造りだ。そしてこの民宿は、旧家をそのまま利用した骨董品のような建物で、遠野ではこういったところに泊まるのが最もしっくりしている。いくつかの部屋を覗いてみたが、座敷わらしを彷彿とさせる女の子の着物や、編み笠がわざと壁にかけてある。家具や調度品も時代物ばかりだ。そして夕食後には語りべが来て昔話をしてくれるという。ここでは泊まり客以外のすべて

が昔のまま。タイムマシンに乗って一世紀前の世界に来たようにも思える。宿のあるじはわけのわからない東北弁の唄を歌いながら自分ですくってきたたくさんの岩魚を串刺しにする。するとその息子は鉢巻きをして火打ち石を出してきて火を起こす。私はいろり端に呼ばれ、すわり、串刺しにされた岩魚とともにいろりの火であぶられる。酒がめいめいに盛られた。そうこうしているうちに加沼氏がやっここにたどり着いた。私は彼をガラス窓越しに見つけるとすぐに玄関に出て彼を迎えた。私は内心彼がなかなか来ないので心細くなっていた。黒茶けた蓑のかかった部屋で一人で寝るのははばかりだ。

同宿の者たちは十人くらいで、「遠野物語」を読んでこの地にあこがれ夏休みを利用して岡山から一人でやってきたが夏休みが過ぎてもそのままここにいるという女子大生、失恋して旅をしているというしきりにはしゃぐOL、公務員と山地主の接待慰安旅行団、夜も遅くなって外人女性も一人入ってきたが、客ではないのかいろり端には来なかった。私らは特に親しく話し合うことはなかったが、加沼氏は公務員たちのなまりの濃い話のなかに東北の情緒を感じて悦に入った。しかし私が秘かに期待していた、語りべによる昔話の披露はその夕はなかった。「婆さまが体調をこわして今夜は来れなくなったす」というのだ。

この古風な民家での夜も更け、私らは部屋に戻って就寝した。しかし私はなぜか夜半に目が覚めた。天井を鼠が走るのか、それとも座敷わらしのいたずらかスクスクという音がする。また雨が降るでもないのに廊下を隔てた雨戸がときたまパタパタという音を立てて震える。そして遠くで地蔵たちがドスンドスンと歩いているような音も聞こえたので耳をすませる、するとすべての音がしーんとして何も聞こえなくなった。

## 遠野の朝

9月30日、いろり端での朝食を済ませると、私はひとり散歩に出た。ここは山裾の上でありあたりは大方リンゴ園だ。これに混じって栗の木もいたるところに点在する。私がなだらかな坂を昇っていくと曲屋の柴犬が10メートルくらいの距離を保ってあとをついてくる。私がリンゴなどを摘むかどうか監視しているようだ。林間の小道に入って私はリコーダーを取り出して一曲犬に聞かせる。するとどこかに行ってしまったが、しばらくしてまた現れた。ここは奥に行けば行くほどもっと先に行ってみたくなるような誘惑的な美しさが織りなすところだ。そのころ加沼氏はひとり鳥見の散策を楽しんだらしい。

さて、私らは一人一万円余りの宿代を払って徒歩でこの民宿を出発し、歩いて20分くらいの五百羅漢を訪ねた。途中で小雨が降り始めた。私は前日のサイクリングでここはすでに訪れていたの近道を知っており、私らはそちらを歩いた。ここは狭い谷川が干上がったようなところで、ある一帯において多くの岩に羅漢が彫られている。二百数十年前のこと幾度も飢饉がこの地を襲い多くの人々が餓死した。その供養のためにある僧がここで数年掛けて羅漢を岩の表面に彫ったと



いう。このような岩はいたるところにあるので気をつけていないと踏みつけてしまう。雨に濡れるのも好きだと言っていた加沼氏もついに雨合羽に着替えはじめたので私は岩に座りリコーダーを取り出して一曲奏でた。

「先ほどのモーツァルトはクラリネット協奏曲でしたっけ」着替え終わった加沼氏は聞き覚えのあるメロディーについて私に尋ねた。「あ、あのメロディーはご存じでしたか。あれはホルン協奏曲の旋律です。」モーツァルト愛好家でもこのメロディーを知っている人は少ない。「ああそうか、曲の最初に出てくる旋律でしたね」

私は高校一年生のとき吹奏楽部に入りフレンチホルンを与えられ練習に励んだ。プロの演奏家はどんな音を出すのだろうかとレコード屋に行きモーツァルトの四つの協奏曲がすべて収録されたカラヤン指揮フィルハーモニア交響楽団でソロホルンを名手デニス・ブレインが演奏したLPレコードを買った。そして最初に耳に飛び込んできた第一協奏曲の第一楽章の爽やかなメロディーに聞き惚れた。一目惚れならぬ一耳惚れだった。以来、私はいろんな楽器を手掛けたが、音が出るようになるとまずこのメロディーを鳴らしてみることになっている。

一度強くなっていた雨がすこし小降りになった。そこからさらに山道を登り、車道に出てそのまま車道沿いに登っていった。駅で入手した地図によると「程洞コンセイサマ」という意味不明の場所がこの近くにあるはずだった。私らはこのコンセイサマとはいったい何様なのかを突き止めることにした。ずいぶん歩いてやっと「程洞コンセイサマ入口」と書かれた立て札のある所に着いた。そこには地元の青年団が寄進した小さな鳥居があり、そこから始まる急な石段を五分くらい登ると古びた神社の境内に出た。男根の形をした巨大な岩が祭られてある。コンセイサマとはこれに違いなかった。木台の上に記帳用の帳面が数冊置いてあり、めくるとこれにまつわる類の悩みを持つ多くの若者が願を掛けていた。「・・・が直りますように」「もっと・・・きくなりますように」等々。

ここを出て車道を避け、急斜面の昔の参道を通って市街地を目指しておりていった。古い家を運んできて改造して見学用に建て直した旧村兵商家に着いたころには雨は上がっており、私らはそこから鍋倉城跡地に赴いた。そして私は加沼氏を誘い再びとおの昔話村に急いだ。着くと、「おばあさん」による昔話はすでに始まっていた。この時の語りべはまた昨日とは違う中年の婦人だった。

## サイクリング

ここから駅に至り、駅前食堂で昼食をすませると私らはレンタル自転車を借りた。帰りの汽車の発車時刻が3時22分であったので2時間のレンタルにした。

線路を越え早瀬川を渡り遠野郷八幡宮に至り、広い境内を歩いてみた。ここには流鏝馬をするための走路が整備されていた。

次に伝承館に着いた。駐車場付近の案内板を見ると、ここでは古い民家がたくさん移築されており、その中には骨董品が陳列され、いろり端で昔話が語られる。私らはもう曲屋で古い家は堪能していたし、ここに入って見学したり話を聞いていると時間的に余裕がなくなるし、加えて入場料も安くなかったので、隙間から中を覗いただけでここは去ることにした。

次に行った常堅寺は古風な名寺であった。狛犬が頭に皿のある河童である。ここから河童淵は歩いてすぐだ。行ってみると思っていたよりも細く浅い小川だった。こんなところに河童が棲めようとも思えないし、民話にあるように馬を引っ張り込むということができそうな深みもなかった。その時私は無性に小便がしたくてたまらなくなっていた。流れの曲がって木陰になったいい所を見つけたので放尿しようとしたところ、足元の水が突然騒ぎ、浮き草の間から華奢で長めの人差し指が水面から突出し、これがまた水に潜ったかと思うとぴんとはじいて水しぶきをはね上げ私のコンセイサマを濡らした。

私らは次に猿ヶ石川を渡り、愛宕川に至り、遠野バイパスに沿って走った。やがて広々とした田園に入る。ある曲がり角で加沼氏は自転車を止め地図を開いた。そして言った、「しまった、長光さん、寒戸のお婆さんの家を通り過ぎてしまいましたね。少し引き返さなければならぬけど行ってみましょうかね？かわいそうな話でしてね、小さいころに山ん婆に・・・」私は心の中でつぶやいた、「加沼さん、あんたは寒戸のばばにはもうすっかり持てなしを受けたんだ、これ以上お世話になることもあるまいよ。」しかしすべてを彼に任せることにしている私は言った、「いいですよ。幼いころ山ん婆にさらわれて自分も山ん婆になり、生まれた家にひょっこり姿を現したお婆さんの話ですね。きっと実話でしょう。あるいはきょうもその寒戸の家に立ち寄っているかもしれません」

おしまい

写真(photos):

[amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](https://amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)